

たんぽぽ

2017. 10. 13



「私の苦しみは誰にも分らない！」

何年前か、腸の病気で入院していたA子さん（小1）のベッドからこんな叫び声が聞こえました。病気のために、長い間食事をする事ができなかったAさんは、その前日にやっと流動食から食事が始まり、お母さんが一生懸命食べさせていたのです。

ところが長い間食えることから遠ざかっていたので、なかなか食べ物が喉を通りません。治療が進んでせつかく食べられるようになったのに「食べたらまたお腹が痛くなるのではないか」という強い恐怖心もあって、こんな叫びになったのだと思います。

明るく元気で勉強も頑張っていたA子さん。教室では毎日「朝の会」の司会を引き受け、大きな声で「朝の歌」も歌っていました。一見元気そうに見えても、入院中の子どもたちは、いろいろな不安や恐怖感、そして様々なストレスとたたかっています。本当は辛いのに、いつも笑顔を見せていたA子さんを元気づけるにはどうしたらいいか悩みました。

「学校の先生が来てくれたんだよ！」

そこで、私たちは小児病棟の看護師さんと相談して、A子さんの担任の先生に病院に来ていただくことにしました。小児病棟には入院中の子どもたちのご両親しか入ることは出来ませんが、医師の許可を受けて北里学級の教室で担任の先生と面会することができる仕組みを作っていたのです。

いつもはガラス越しの面会しかできなかった担任の先生とAさんは、北里学級の教室で本当に楽しいひと時を過ごしました。

「早く治して、早く学校行くんだ！」Aさんは頑張ってお飯も食べられるようになり、まもなく退院することができたのです。

在籍校との連携が子どもを支える

北里学級では、子どもたちが在籍している学校との連携を大切にしています。学校の先生に、病院に来ていただくことをはじめ、北里学級の職員が在籍校を訪ねて、担任の先生と情報交換をしたり、ビデオレターを撮影させてもらったりしています。「君のこと、忘れてないよ」という担任の先生やクラスの仲間のメッセージが、入院中の子どもたちに大きな勇気を与えてくれるのです。

サッカー選手が来てくれたよ！



9月27日（水）、Jリーグ加盟チームのSC相模原の選手の方が2名、小児病棟を訪問してくれました。プロのサッカー選手が来てくれるというので、子どもたちはもちろん、病院のスタッフの皆さんも見学に来て、中には色紙にサインを求めるスタッフもいるほどでした。毎週木曜日にオープンしている

「キッズガーデン」に集合した子どもたちや保護者の方は、目の前で繰り広げられるリフティングやヘディングの演技を楽しみました。

サッカーを始めたきっかけや、子どもの頃がんばっていたこと、いつもの練習の様子など、子どもたちや保護者の方からの質問にも気さくに答えてくれました。

入院中の子どもたちも一緒にボールをキックしたり、病院スタッフの方も参加してリフティングのラリーを楽しみました。

今回病院に来てくれたのは、横浜市出身の石垣徳之選手と奈良市出身の松木政也選手。入院中の子どもたちは、二人の選手からたくさんの元気をプレゼントしてもらいました。

